

<北海道熊研究会報>

第 19 号 2013 年 12 月 15 日

ご意見ご連絡は下記へどうぞ

北海道熊研究会事務局 北海道野生動物研究所内(Tel. 011-892-1057)

代表 門崎 允昭 e-mail: kadosaki@pop21.odn.ne.jp

事務局長 Peter Nichols ピーターニコルス氏

幹事長 藤田 弘志 氏

北海道熊研究会」Hokkaido Bear Research Association

Website は「北海道野生動物研究所」と入力して下さい

[I] 熊対策に河畔林伐採は間違い

河畔林伐採に関する北海道新聞(道新)の報道

その①(2012 年 9 月 27 日道新、熊対策に、北の沢川の河畔林を伐採した)の記事

-----「2012 年の 9 月、道は道が管理している札幌市南区川沿地区の北の沢川と、中の沢川の合流地点から北の沢川の上流部の約 300m の範囲の河畔林を、熊が出没する際の通路になるとし、河畔林を伐れば隠れ場が無くなり熊が通るのを嫌うとし、伐採した」と言う内容。

その②(今年 2013 年 10 月 22 日道新、北大の坪田敏男教授は熊対策に河畔林伐採は有効)の記事-----坪田に寄ると、10 月 20 日夕方から夜にかけ、南区の石山と硬石山で

目撃された熊は体高(地面から肩までの高さ)が 70~80cm で餌を求めて歩き回り、豊平川の河畔林を通過して、帰り道が分からなくなったのでは」とみる。「河畔林の伐採や、山際の林の下草刈りで熊の市街地への進入を防げる」と言う内容。「(熊の大きさは通常体長「鼻先と肛門間の直線距離」で言うが)、河畔林を伐れば隠れ場が無くなるということを、言う為に、彼は故意に体高を言ったものであろう(門崎の感想)」。

その③(②と同じ記事に。この「2013 年」9 月下旬に南区の石山、川沿地区に出没した若い雄が、ハンターによって射殺された。この熊は豊平川の河畔林を伝って市街地に迷い込んだと専門家達はみている)の記事。この熊の銃殺の顛末は会報 17 号に掲載済み。

、

<熊対策に河畔林伐採は間違いだとする私の根拠>

①市街地に出て来る熊はどんな熊か

「札幌市で 2011 年に円山等に、そして 2012 年に藻岩・川沿・真駒内などに、そして今年上の記事に取り上げられている熊は総て、母熊から 5 月から 8 月の間に自立させられた満 1、2 歳の若熊(自立するのは、子が 1 頭の場合は満 1 歳の、子が複数(2~3 頭)の場合は満 2 歳の 5 月から 8 月の間である)である。「子熊」とは母が連れ歩いている子を言う。母から自立した年の

熊は「若熊」と言う。熊の年齢は2月1日を誕生日として計算する。

②市街地に出て来る理由

母から別れたことで、新たな生活圏を確立すべく森林(熊の基本的な生活地は森林である)を探索徘徊していて(これは本能的な行動である)、林地の端に来て、そこに人家があるのを見て、己が生活地として使って良い場所か否か、好奇心を起し、学習に出て来るのである。母熊と一緒にいる時は、母熊が人家の在る所に出る事を許さない。そして、実見し己が生活し得る場所でないことを悟り、納得すれば出て来なくなる。納得するまで出沒を繰り返す。その場合、同じ場所から出て来ることもあれば、相当時期をずらして、他所から出て来ることもある。坪田や専門家なる者が言って居ると言う「迷い出て来たものでは決してない」。

③若熊は市街地に必ず出て来るものか

これは住宅地近くの樹林地を生活圏の一部としている若熊にとって、その成長段階として、体験せねばならない掟とも言うべき行動である。従って、そのような若熊が札幌の市街地近傍の森林に生ずる限り、繰り返し発生する。

④出沒時期

母から5月～8月の間に若熊は自立するから、出沒が早い場合は6月から市街地に出て来る。そして遅い場合は10月に出て来る。

⑤出沒時間

市街地に出て来る時間帯は、通常、人と遭遇し難い時間帯に出て来る。即ち、夕方から明け方の時間帯に出て来る。しかし、満1歳過ぎで、母から5、6月に自立させられた若熊は知恵が未発達で、明るい時間帯に出て来る事がある。但し、己が生活地として安全に使った事がある地所は、樹林地でなくても、年齢に関係無く日中安心して使うことがある。

⑥河畔林を伐採しても熊は出て来る

若熊は河畔林の有無に関係無く、通常は人と遭遇し難い時間帯に出て来るから、河畔林の伐採が熊の通路を無くし、市街地への出沒を防ぐ手立てにはならない。毎年母から自立した若熊が生じる札幌の西部の山林を全部伐採しない限り、このような出沒は今後も毎年起ると言う事である。

<若熊は人を襲わない>

このような若熊は、人を襲う事は絶対に無い。根拠は私(門崎)が熊を研究始めた1970年以来、この種の熊による人身事故が皆無だからである。

満2歳代以下の若熊の体長は1.3m以下である。そして、足の横幅は13cm以下である。

<結論>

行政に参与している研究者が、熊の生態を正しく見極められないから、不適切な対応をし、市民の不安を煽り、殺さずとも良い若熊を殺しているのである。